

母性理念の概念的構造に関する再検討

— 母性理念質問紙と役割志向性尺度・DSQ42を用いて —

松下 姫歌・村上 智美¹

(2009年10月6日受理)

A Review about the Conceptual Structure of the Idea of Motherhood:
By Using of the Idea of Motherhood Questionnaire, Inventory of Sex-Role Orientation and DSQ42

Himeka Matsushita and Tomomi Murakami

Abstract: The purpose of this study was to review the conceptual structure of the idea of motherhood. Specifically, the validity of the structure was investigated by the second factor analysis of the idea of motherhood questionnaire and the correlation analysis to investigate the relation among the idea of motherhood questionnaire, Inventory of Sex-Role Orientation (ISRO) and A Japanese version of the Defense Style Questionnaire (DSQ42). According to the survey, the second factor analysis showed that the conceptual structure of the idea of motherhood is two-factor structure as well as the result of Matsushita and Murakami (2007), and the two-factor indicate 1) an aspect of accepting traditional idea of motherhood as a female nature, 2) an aspect of thinking good about that the child is their own support. That is to say, the two-factor indicate Traditional idea of motherhood and Child-dependent idea of motherhood. In the correlation analysis, the following were shown:1) As for Traditional idea of motherhood and Sex-Role Orientation, the aspect is different, 2) It is shown the connection between Traditional idea of motherhood and Immature defense styles, 3) It is shown the connection between Child-dependent idea of motherhood and Adoptive defense styles. These results suggested that it is able to confirm the validity of the conceptual structure of the idea of motherhood in this study.

Key words : idea of motherhood, the idea of motherhood questionnaire , ISRO, DSQ42
キーワード : 母性理念, 母性理念質問紙, 性役割志向性尺度, DSQ42

問題と目的

1. はじめに

近年、出産・育児に関する葛藤や虐待などの問題がクローズアップされており、子どもに優しい母親でありたいのに、イライラしてしまって辛く当たってしまう、母性をうまく受け入れられないという葛藤を持つ女性は少なくない。現代の女性は、母性をどのようにとらえ、感じ、体験しているのだろうか。

2. 母性の概念について

「母性」は、元来は医学領域において、女性の“産む”生物学的側面を指す概念であった。しかし、Deutsch (1944) は母性を「社会的、生理学的、感情的な統一体としての、母の子に対する関係を示すもの。こういう関係は受胎と共に始まり、その後の妊娠、出産、飼養、養育の生理的過程を通じて続く。こういう作用にはすべて、感情的反応がともなうが、これはまだある程度までは、その種族に典型的なもの、あるいは共通のものだが、大部分は個人的な多様性があるものだ。というのは、これは女性個々について、その全人格と

¹広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

切り離せないものだからである」と定義しており、近年では、このような、母性を“子を産み・育てる”力の生物学的・社会的・心理学的側面を包括する概念として捉える立場が主流となっている（大日向, 1988; 花沢, 1992; 上別府, 2003）。

中でも花沢（1992）は、母性とは児（自分が出産した子に限らない）に対する母親としての関わり、あるいは母親らしい関わり（まだ母親になっていない妊婦や未婚の女性による関わり）に示される女性のパーソナリティの一面と定義しており、Deutsch 同様、母性を女性のパーソナリティの一面として捉えている。また、母性は妊娠、出産、育児などの経験によって形成され、これらの経験には個人差があるので、母性にも当然個人間差異が存在すると指摘している（花沢, 1977）。

3. 花沢（1992）の母性意識と母性理念

花沢（1992）は、母性のうちの意志的な面を母性意識と呼んでいる。母性意識には①母親自覚と②母性理念が含まれるとしている。①母親自覚とは、女性が母親になる、あるいは母親であることの自覚である。多くの女性の場合妊娠の経験に伴って生じるとしている。②母性理念とは、自分が母親になる・母親であるという自覚に基づく妊娠・分娩・育児への態度と価値観である。母性理念は、幼児期からの生育史のうちに生成されて個人的諸経験を重ねることによって形成され変容するものとされている。換言すれば、母性意識とは、自らのうちに母性をどのように意識する（見いだす・捉える）かであり、その“実感”面が母性自覚であり、“観念”面が母性理念である。さらに言えば、母性理念は、母性をどのように捉えているかという母性観、すなわち意識上で捉えられている母性イメージといえる。本研究では、母性意識のうち、意識的な母性イメージとしての母性理念をとりあげたい。

4. 母性理念の概念と母性理念質問紙（花沢, 1992）

花沢（1992）においては、母性理念は「伝統的な母性を肯定するか否定するかという態度・価値観」として考えられており、この考えに基づいた、母性理念質問紙を作成している。この母性理念質問紙は母性の研究において多用されており、これまで母性理念の世代別比較や性差の比較、母親であるか母親になる前の女性かによる比較などがなされている。

母性理念質問紙については再検査により信頼性が確認されている。しかし、その妥当性については、母性に関する意識を測定しうる初めての質問紙であったため、母性理念という概念が伝統的な母性を肯定するか否定するかという態度・価値観であるという前提で作ら

れており、母性理念の概念の構造については特に検討されていない。

この母性理念質問紙（1992）に先立ち、花沢（1975）は「(仮称)育児期・母性心理検査表」を試作している。ここでいう母性心理は、のちの母性意識、すなわち母性自覚と母性理念を含むものであると考えられるが、この検査表は、①幼少児への愛着、②母としての意識、③養育の欲求と行動、④吾子への同体視、⑤日常における吾子指向、⑥吾子への嫌悪感から構成されている。つまり、花沢（1975）は母性意識すなわち母性自覚と母性理念には上記の6項目が含まれると想定していたと考えられる。実際のところ、母性理念質問紙（1992）作成時にこの検査表が参考にされている。したがって、花沢が母性理念質問紙で想定する伝統的な母親役割には上記の構成概念が含まれていると考えていたことがうかがわれるが、母性理念にこれらの6項目がどのように含まれるかといった概念構造についても特に検討されていないようである。

母性理念の概念構造に関し、松下・村上（2007）において、母性理念質問紙の因子分析を行ったところ、母性理念の概念は、花沢（1992）の想定していた「伝統的な母性を肯定するか否定するか」という構造をもつものではなく、①伝統的な母性像を肯定し、妊娠・分娩・育児が女性の本質であるとする「伝統的な母性理念」、②子育てに生きがいや楽しさを見だし、ひいては自分の成長を見いだすというように、子どもを個としての自己の支えとすることを肯定する「子依存的母性理念」の2因子構造からなる概念であることが確認された。

松下・村上（2007）で抽出された2因子の内容と、花沢（1975）が伝統的な母性に含まれると想定していた6項目とを照らしてみると、「伝統的な母性理念」因子には、①幼少児への愛着、②母としての意識、③養育の欲求と行動の3項目にほぼ対応しており、社会的な側面から考えられる母親役割や、自分自身の子どもに限定しない、“赤ちゃん”や“子ども”に対して感じる母親役割を肯定する概念が含まれていると考えられる。一方、「子依存的母性理念」因子は、④吾子への同体視、⑤日常における吾子指向、⑥吾子への嫌悪感（逆転項目として含まれている）にほぼ対応し、自分と子どもとの関係の中で見られる母親役割を肯定する概念が含まれていると考えられる。したがって、母性理念の概念に関する内容的妥当性は満たしていると考えられる。

このように、松下・村上（2007）の2因子はそれぞれ、花沢の考える伝統的な母親役割が、①伝統的・一般的に良いとされてきた母親役割を肯定する概念と②子

どもに対して向けられる自己同一視的な母親役割を肯定する概念に分かれたものであることが示唆されるが、母性理念の概念がこうした2因子構造をもつことについては、松下・村上(2007)においては α 係数による信頼性の確認にとどまっておらず、構成概念妥当性についての検討が必要であると考えられる。

したがって、本研究では、母性理念の概念が、①伝統的母性理念、すなわち伝統的母性を肯定する理念と、②子依存的母性理念、すなわち子への同一視的な母性を肯定する理念からなるかどうかについて、構成概念妥当性を検討する。①伝統的母性理念については、伝統的な性役割志向性との関連が見られると考えられ、②子依存的母性理念については、「投影同一視」や「行動化」など、未分化な防衛機制との関連が見られると考えられる。性役割志向性および防衛機制について測定する尺度を用いて、これら2因子との関連を調べる。

5. 性役割志向性尺度と防衛スタイル質問紙(DSQ42)

1) 性役割志向性尺度

伝統的な性役割志向性を測りうる質問紙として、1981年に Dreyer, D. A. が発表した性役割志向性尺度の日本版(東・小倉, 1984)があげられる。16項目から構成されており、「非常に賛成」～「非常に反対」の5件法である。「非常に賛成」に1点～「非常に反対」に5点を与え、得点可能な範囲は16～80点となる。得点が高いほど性別役割分担を否定する傾向が強く、男女の平等観が強いことを意味している。

東(1990)によると、Dreyer は性役割志向性の概念を構成し、尺度を作成するに当たって次のように述べている。伝統的な性役割志向を持つ人、とりわけ女性は、その行動が古い世代から受け継がれた習慣や慣例によって規定されており、男女平等へと向かっている風潮にもかかわらず、ほとんどその影響を受けていないという実態がある。それに対してフェミニストは、理論的な側面においても、また日常の実践活動の側面においても、社会の変革を求めるし、政治的、経済的な面での男女の平等を提唱する傾向がある。さらに、伝統的な女性とフェミニストの女性とは、本人が家族を優先するのか、あるいは自分自身を優先させるのかという点で異なっている。伝統的な女性は自分自身の満足を夫や家族の満足あつてのものと考えている。この因襲的な考え方の枠組みにおいては、家族への責任のほうに自分の職業上の可能性に優先する。つまり、職業によって自分を伸ばすことよりも、家族での責務を果たすことにウェイトをおく。これに対して、フェミニストの女性は家族や世間の期待するところと同じ程度

に、自分の人間的成長の達成度を重視している。

以上のように、伝統的な性役割志向を持つかどうかを測定するこの尺度は、伝統的な母性像を肯定する「伝統的母性理念」因子との関連が見られることが予想される。

2) DSQ42

防衛機制を測定する質問紙として、Defense Style Questionnaire 日本語版(DSQ42)があげられる。DSQ42は、Bond らが1993年に発表したDSQ40をもとにして中西(1998)によって作成された質問紙である。中西によると、DSQは、防衛機制を特定する際の、評定者間信頼性という問題を克服するためにBondが発表したもので、外からの刺激への対応の自己評価によって、無意識に機能する防衛機制を探るものである。防衛機制を直接測定するわけではなく、主な防衛スタイルを概観する事から防衛機制を探る。防衛機制は無意識の機能なので、自己申告では測定できないという意見に対しては、以下の3点を挙げて反論している。(1)時として防衛はその役割を果たすことができず、人々は容認できない衝動や通常なされるその衝動への防衛スタイルに気付く事が出来る。(2)防衛が起こっている時に気付かなくとも、回りの人間からたびたび自分の防衛機制について指摘される。(3)自分にとっての防衛的行動が取れない時に、不安や抑うつを感じた事を記憶しているかもしれない。

この質問紙では人々が自分達の行動を客観的に報告できるという仮説のもとに、葛藤状況に対処するための自分の特徴的なスタイルを引き出すように設計されている。しかし、あくまでDSQは自己申告であるため、中西はDSQ42の作成に当たって、DSQ40にはない虚偽検知項目を2項目加えている。この質問紙は、「私に全然当てはまらない」～「私に全く当てはまる」の9件法で、以下の20の防衛スタイルをそれぞれ2項目で判定する。Ⅰ. 未熟な防衛：①投影、②受動攻撃、③行動化、④隔離、⑤価値下げ、⑥自閉的空想、⑦否認、⑧置き換え、⑨解離、⑩分裂、⑪合理化、⑫身体化。Ⅱ. 神経症的な防衛：⑬打ち消し、⑭エセ愛他主義、⑮理想化、⑯反動形成。Ⅲ. 成熟した防衛：⑰昇華、⑱ユーモア、⑲予測、⑳抑制。

以上より、本研究では、花沢(1992)の母性理念質問紙の構造を再検討することを目的とする。具体的には、松下・村上(2007)で得られたデータに2009年のデータを加え、人数を増やしたうえで因子構造を確認、また、2007と比較し、各因子の性質を明確にする。

また、母性理念質問紙と、性役割志向性尺度、DSQ42の間の相関を検討し、構成概念妥当性の確認を行う。

方 法

被検者：女子大学生418名、平均年齢は19.15歳であった ($SD = 1.03$, $range = 18 \sim 22$ 歳)。

調査日時：2009年6～7月。

手続き：集団法による以下の3つの質問紙を用いての調査。①花沢 (1992) の母性理念質問紙27項目5件法、②東・小倉 (1984) の性役割志向性尺度16項目5件法、③中西 (1998) の Defense Style Questionnaire 日本語版 (DSQ42) 42項目9件法を用いた。所要時間は15分程度であった。

【仮説】

- ① 母性理念質問紙の「伝統的母親理念」因子と性役割志向性尺度との間に負の相関が見られる。
- ② 母性理念質問紙の「子依存的母性理念」因子とDSQ42の未熟な防衛との間に正の相関が見られる。

結 果

1) 母性理念概念の因子構造の再確認

松下・村上 (2007) での調査対象者122名と今回の調査対象者418名を合わせ、合計530名 (平均年齢19.32歳, $SD = 1.09$, $range = 18 \sim 22$ 歳) における、母性理念質問紙27項目それぞれの回答について、「非常にちがう」に1点、「ちがう」に2点、「どちらともいえない」に3点、「そう思う」に4点、「非常にそう思う」に5点の素点を与えた上で、これらの数値をもとに、因子分析を行った。回転方法については、相関が想定されるため斜交回転を採用した。

母性理念質問紙27項目のうち、フロア効果が見られた1項目 (3. 妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである) を除外した26項目について、重み付けのない最小二乗法による因子分析を行った。固有値の減衰状況、解釈可能性および累積寄与率等から、因子数を2に指定し、再度、因子分析 (重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転) を行った。

その結果、両因子における因子負荷量が.35に満たない次の5項目 (19. わが子の成長を見とどけるために、長生きをしなければならぬ、18. 育児は妻だけでなく、夫も分担すべき仕事である、9. 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もやむを得ない、5. 赤ちゃんを無事に産むためなら、どんな苦しみも我慢できる、15. わが子を他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである) を削除した。

項目24「育児から解放される時に、人間らしい自由な生活ができる」は、両因子とも負荷量が.35以上であった項目であるが、第1因子と第2因子で負荷の

かる方向が異なっており、2つの因子を弁別しうる項目であると考えられる。よって項目24は各因子に含めて扱うことにする。

その結果、第1因子10項目、第2因子12項目からなる2因子が抽出された (Table 1)。

第1因子は、「11. 女は子どもをもつことで人生の価値を知ることができる」、「10. 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の務めである」、「13. 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である」、「16. 子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない」、「7. 女は子どもを産むことで、自分が生きた証拠を残すことができる」、「20. 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である」、「26. 育児に専念したいというのが、女の本音である」、「8. どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである」、「23. 子どもを育てるのは、生みの母が最良である」、「24. 育児から開放されるときに、人間らしい自由な生活ができる」の10項目からなる。

項目内容から、子を産み育てる母性とそれを引き受ける母親役割についての「社会」的な価値を肯定する項目が多い。昔から世間一般で良いとされてきた女性像・母性像を肯定している項目が抽出されていると考えられる。松下・村上 (2007) と比べて、項目1が因子Ⅱで抽出され、項目24が新たに抽出されている以外は、松下・村上 (2007) の「伝統的母性理念」因子の項目と共通しており、第1因子を「伝統的母性理念」因子と呼ぶことにする。

第2因子として抽出された12項目のうち、項目12・14・17・24・25・27は松下・村上 (2007) の分析での「子依存的母性理念」因子の項目と共通している。内容を検討すると、「12. 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらぬほうがよい (逆点項目)」、「14. 子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる」、「17. 子どもがいることで、家庭生活はより楽しくなる」、「24. 育児から開放されるときに、人間らしい自由な生活ができる (逆点項目)」、「25. わが子の存在を感じるだけで、毎日の生活にはりが出る」、「27. 母親が子どもの成長を生き甲斐にするというのは間違っている (逆点項目)」であり、子育てに生きがいや楽しさを見いだし、ひいては自分自身の成長を見いだすといったような、子どもを自己と同一視し、自己の支えとすることを肯定する方向性の項目が抽出されている。今回の結果では、これらに加えて、項目1・2・4・6・21・22も抽出された。項目内容を検討すると、「1. 妊娠は、女にとってすばらしい出来事である」、「2. 赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である」、「4. 赤ちゃんを産んではじめて、

Table 1 2007+2009母性理念質問紙因子分析結果（回転後）

| 項目 | 1 | 2 | 共通性 |
|-----------------------------------|--------|--------|-------|
| 11. 女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる | 0.686 | -0.057 | 0.438 |
| 10. 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の務めである | 0.667 | -0.051 | 0.415 |
| 13. 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である | 0.586 | -0.074 | 0.309 |
| 16. 子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない | 0.567 | -0.154 | 0.265 |
| 7. 女は子どもを産むことで、自分が生きた証拠を残すことができる | 0.559 | -0.024 | 0.301 |
| 20. 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である | 0.511 | 0.090 | 0.311 |
| 26. 育児に専念したいというのが、女の本音である | 0.489 | 0.054 | 0.267 |
| 8. どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである | 0.482 | -0.099 | 0.198 |
| 23. 子どもを育てるのは、生みの母が最良である | 0.402 | 0.050 | 0.182 |
| 24. 育児から解放される時に、人間らしい自由な生活ができる ※注 | 0.407 | -0.570 | 0.278 |
| 12. 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらないほうがよい | 0.097 | -0.642 | 0.365 |
| 25. わが子の存在を感じるだけで、毎日の生活にはりが出る | 0.240 | 0.536 | 0.462 |
| 17. 子どもがいることで、家庭生活はより楽くなる | 0.266 | 0.529 | 0.480 |
| 21. 育児に追われていると、若さが早く失われる | 0.294 | -0.501 | 0.202 |
| 14. 子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる | 0.181 | 0.473 | 0.335 |
| 1. 妊娠は、女にとってすばらしい出来事である | 0.349 | 0.431 | 0.445 |
| 6. 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは、不公平である | 0.105 | -0.384 | 0.122 |
| 2. 赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である | 0.214 | 0.384 | 0.269 |
| 22. わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる | 0.190 | 0.376 | 0.244 |
| 27. 母親が子どもの成長を生き甲斐にするというのは間違っている | -0.133 | -0.358 | 0.189 |
| 4. 赤ちゃんを産んでからはじめて、子どものかわいさがわかる | 0.322 | -0.352 | 0.123 |
| 19. わが子の成長を見とどけるために、長生きをしなければならない | 0.272 | 0.217 | 0.175 |
| 18. 育児は妻だけでなく、夫も分担すべき仕事である | -0.013 | 0.241 | 0.055 |
| 9. 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もやむを得ない | -0.027 | -0.234 | 0.061 |
| 5. 赤ちゃんを無事に産むためなら、どんな苦しみも我慢できる | 0.217 | 0.219 | 0.139 |
| 15. わが子を他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである | -0.023 | -0.167 | 0.032 |
| | 因子間相関 | | 0.460 |

因子抽出法：重みなし最小二乗法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

※注）項目24は両因子ともに負荷量が.35以上であったが、負荷の方向が異なるため、弁別力があるとみなし削除せず両因子に含めている。

子どものかわいさがわかる（逆点項目）」、「6. 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは、不公平である（逆点項目）」、「21. 育児に追われていると、若さが早く失われる（逆点項目）」、「22. わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる」、というように、子どもを産み育てることの苦勞はいとわず、むしろ自身を犠牲にしてもかまわないと思うほど子どもという存在

を素晴らしいものであると感じ、自己の支えとすることを肯定する項目であると考えられる。よって、第2因子についても、松下・村上（2007）にならい「子依存的母性理念」因子と呼ぶことにする。また、この第2因子は、「生み育てる母性」に「女性の固有の価値」「自分にとっての価値」を見いだす項目が多く、第1因子「伝統的母性理念」が「生み育てる母性」に「社

会的価値」を見いだそうとする点と対照的である。

2) 相関分析結果

次に、母性理念質問紙と性役割志向性およびDSQ42の妥当性を調べるために、相関分析を行った。母性理念質問紙は、今回の因子分析で抽出された2つの因子ごとに因子得点を算出した。性役割志向性尺度とDSQ42は、どちらも従来の手順に則って得点を算出した。まず性役割志向性尺度は、項目4・6・8・10・13・14に逆転項目の処理を行い、合計得点を算出した。得点は、高いほど性役割分担を否定する傾向が強く、男女の平等観が強いことを意味する。DSQ42は、未熟な防衛、神経症的な防衛、成熟した防衛の3つに分けて、それぞれ合計得点を算出した。未熟な防衛は、分類される12の防衛スタイルの計24項目の合計を項目数の24で割ったものを得点とした。神経症的な防衛、成熟した防衛は、それぞれ分類される4つの防衛スタイルの計8項目の合計を項目数の8で割ったものを得点とした。相関分析の結果をTable2に示した。

Table 2 各尺度の相関分析結果

| | | 尺度 | r値 | 有意水準 |
|--------|-----------------------|------------|--------|-----------|
| 母性Ⅰ | DSQ42 | 性役割志向性 | 0.549 | $p < .01$ |
| | | I 未熟な防衛 | 0.065 | |
| | | II 神経症的な防衛 | 0.168 | $p < .01$ |
| | | III 成熟した防衛 | -0.027 | |
| 母性Ⅱ | DSQ42 | 性役割志向性 | -0.065 | |
| | | I 未熟な防衛 | -0.314 | $p < .01$ |
| | | II 神経症的な防衛 | 0.098 | $p < .05$ |
| | | III 成熟した防衛 | 0.084 | $p < .05$ |
| 性役割志向性 | DSQ42 | I 未熟な防衛 | 0.128 | $p < .01$ |
| | | II 神経症的な防衛 | 0.048 | |
| | | III 成熟した防衛 | -0.089 | $p < .05$ |
| DSQ42 | I 未熟な防衛とII 神経症的な防衛 | | 0.418 | $p < .01$ |
| | I 未熟な防衛とIII 成熟した防衛 | | 0.223 | $p < .01$ |
| | II 神経症的な防衛とIII 成熟した防衛 | | 0.274 | $p < .01$ |

信頼性の検討として、 α 係数を算出したところ、第1因子に高い負荷をもつ9項目では.764、第2因子に高い負荷を持つ項目（項目6・12・21・24・27は逆転処理した）では.702であった。これより、第1因子・第2因子ともに内的一貫性を確認することができた

まず、母性理念質問紙の第1因子と性役割志向性尺度、DSQ42との関連では、性役割志向性尺度との間に中程度の正の相関を示し、DSQ42の神経症的な防衛との間に弱い正の相関を示した。

母性理念質問紙の第2因子と性役割志向性尺度、DSQ42との関連では、DSQ42の未熟な防衛との間に弱い負の相関、DSQ42の神経症的な防衛・成熟した防衛との間に弱い正の相関を示した。

また、性役割志向性尺度とDSQ42との関連では、未熟な防衛との間に弱い正の相関、成熟した防衛との間に弱い負の相関が見られた。

DSQ42の3つの防衛スタイル間の関連では、未熟

な防衛と神経症的な防衛との間に中程度の正の相関が、未熟な防衛と成熟した防衛、神経症的な防衛と成熟した防衛の間にそれぞれ弱い正の相関が見られた。

考 察

1. 母性理念の概念の構造について

母性理念の概念の構造について確認するため、松下・村上（2007）から被検者を大幅に増やして、因子分析により再検討したところ、今回も松下・村上（2007）同様、2因子が抽出された。

各因子の項目内容を検討してみると、今回の因子分析においても、花沢の想定していた、伝統的な母性意識を肯定するか否定するかというのではなく、1因子構造ではなく、伝統的な母性役割を、女性本来の本質とし受容する面と、子である自分の支えとすることを肯定する面の2因子構造から成ると考えられる。

今回の因子分析の結果について、松下・村上（2007）での因子分析と比較していくと、まず、第1因子については、項目1が因子Ⅱで抽出されており、項目24が新たに抽出されている以外は前回と同じ項目が抽出されていた。すなわち、前回の因子分析において第1因子として抽出されたものが、今回も第1因子として抽出されている。これより、女性の母性理念を見ていく際には、昔から世間で良いとされる、伝統的な考え方が1つの大きな要素として挙げられることが示されたと言える。

次に第2因子について、項目12・14・17・24・25・27は前回の分析でも第2因子で抽出されているもので、共通している。項目12・24・27も前回同様、負の方向に負荷がかかっている。項目2・6・21(逆転)・22も、出産や育児への肯定的な考えであり、かつ、自身を犠牲にしてもかまわないと思うほど子どもを自己の支えとすることを肯定する項目であると考えられ、第2因子は前回同様、子育てに自分自身の成長を見だし、子どもを自己の支えとすることを肯定する因子であると言える。これより、女性は母性理念について考える際、伝統的な考え方とともに、子どもとの関係という視点も大きな要素として存在することが考えられる。

1) フロア効果が見られた項目について

今回の分析では、松下・村上（2007）の分析同様、項目「3. 妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである」においてフロア効果が見られた。前回と同様に、やはり質問の表現が極端であるために弁別力が得られなかった可能性がある。

2) 両因子における因子負荷量が.35に満たない5項目

これらは、両因子とも負荷量が0.35以下のため除外され、両因子とも質の異なる概念、あるいは、一定の方向性をとらない、項目理解の個人差が生じると考えられる項目である。

項目「5. 赤ちゃんを無事に産むためなら、どんな苦しみも我慢できる」、「19. わが子の成長を見とどけるために、長生きをしなければならない」は、対象となった女子大学生には、リアリティを感じにくいものであり、自分の中に位置づけることが難しい項目であった可能性が考えられる。

項目「9. 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もやむを得ない」、「15. わが子を他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである」、「18. 育児は妻だけでなく、夫も分担すべき仕事である」は、社会の変化とともに女性の意識も変化しているために個人差が出やすい、社会的な価値観によって左右される項目であったと推測される。

2. 相関分析について

次に、母性理念質問紙の各因子と性役割志向性尺度、DSQ42の相関分析の結果について見ていく。今回、中程度以上の相関が見られたのは、母性理念質問紙の第1因子と性役割志向性尺度との間の正の相関と、母性理念質問紙の第2因子とDSQ42の未熟な防衛との間の負の相関であった。

1) 第1因子と性役割志向性との関連

第1因子と性役割志向性との間に正の相関が見られたということは、伝統的母性理念の受容度が高いほど、性役割分担を否定する傾向が強くなり、男女の平等観が強くなる、と考えることができ、当初考えていた仮説とは反対の結果である。これについて、伝統的母性理念で測られているものは、「母性を引き受けるべし」という理念ではあっても、旧来の社会的な男女の位置づけを肯定する理念とは必ずしも同じではない、ということが示されていると考えることができる。

伝統的母性理念の項目を見ると、「育児は社会に対する女の務め」、「赤ちゃんは母乳で育てるべき」、「育児は生みの母が最良」といった、社会通念としての母性が抽出されていることが分かる。すなわち、女性が社会の中で生きていくためには子どもが必要であり、子どもを産み育てることは義務である、と考えるものである。そして、社会通念として必要である・義務である、ととらえられるため、子どもや育児に対して価値は感じているが、同時に社会に縛られているという感覚も併せ持つ可能性が推測される。

これより、今回の相関分析結果と照らし合わせて考えてみると、伝統的母性理念、すなわち社会通念とし

ての母性を受容するほど、社会に縛られている感覚も持ちうることで、社会の中の女性という枠にとらわれず、男性と対等でありたいとする気持ちを持つこととが関連したと考えることができる。

2) 第2因子とDSQ42の未熟な防衛との関連

次に、第2因子とDSQ42の未熟な防衛との間に負の相関が見られたということは、すなわち子どもを自己の支えとすることを肯定するほど、未熟な防衛スタイルをとらない、ということである。

未熟な防衛スタイルは投影、受動攻撃、行動化、隔離、価値下げ、自閉的空想、否認、置き換え、解離、分裂、合理化、身体化の12あり、その行動特徴としては、うまくいっていない場合にそれをとかく人のせいにしてしまう傾向やつらい事から目をそらす傾向、物事を自分の都合の良いように考えてしまう傾向などがあげられる。

しかし、上記のような未分化な防衛スタイルを取る者は、当該の防衛スタイルを示す項目を、自分のものとして捉えられないと考えられるため、質問紙の結果をどう判断するかに問題が残る。これは神経症的な防衛や成熟した防衛などのほかの防衛スタイルの測定にも言えることである。よって、今回第2因子の妥当性について、DSQ42を用いて検討することは難しかったと言える。子への同一視的なあり方といった点は、質問紙だけではとらえきれないことが推測され、投影法などのより無意識的な部分をとらえられる方法を用いることが望ましいと考えられる。

また、今回、第2因子が子への同一視的な母性を肯定するものであると考えられたため、投影同一視といった防衛機制の観点からとらえようと、DSQ42を用いた。しかし、そのように「防衛機制」としてとらえるのではなく、同一視を「自他未分化」としてとらえ、そうしたあり方を測定することができる質問紙を使用することが望ましかった可能性も考えられる。

今後の課題

今後の課題としては、特に第2因子の子依存的母性理念について、引き続き妥当性の検討を行っていく必要があると考えられる。本研究から、投影法を用いることによって、より無意識的な視点からのアプローチが可能となり、子への同一視的な母性のあり方、ひいては母性理念の構造を明らかにしていくための一助となることが示唆された。

【引用文献】

- Deutsch, H. (1944): Psychology of Women(懸田克躬・原百代(訳)(1964): 母親の心理 1 母性のきざし 日本教文社)
- 大日向雅美(1988): 母性の研究 川島書店
- 花沢成一(1992): 母性心理学 医学書院
- 上別府圭子(2003): 母性の再考—父親から虐待を受けた女性と母親— 精神分析研究, 47, (1), 29-38.
- 花沢成一(1977): 妊産婦の不安に関する心理学的研究 日本大学人文科学研究所紀要, 19, 107-125.
- 花沢成一(1975): 幼児をもつ母親の母性発達と養育態度—母性心理学研究 I— 日本心理学会第39回大会発表論文集, 330.
- 松下姫歌・村上智美(2007): 母性理念の構造に関する検討—母性理念質問紙の分析を通して— 広島大学心理学研究, 7, 315-323.
- 東清和(1990): 青年期における性役割志向性の性差 社会心理学研究, 6, (1), 23-32.
- 中西公一郎(1998): The Defense Style Questionnaire 日本語版(DSQ42)—日本での防衛機制研究のために— 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 47, 27-33.
- 東清和・小倉千加子(1984): 性役割の心理 大日本図書株式会社